
ドラゴン注意報

百瀬華音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン注意報

【Nコード】

N1709A

【作者名】

百瀬華音

【あらすじ】

肝心なときには、いつも姿が見えないのです

「もっと町長としての自覚を持つべきだろ……って」

ハア、と大きなため息をつく。顔を合わせればすぐにコレだ。自分で言うっておきながらビルシの顔がふとよぎり、忘れかけていた怒りがフツフツとこみ上げてきた。

傍らの枕をわしづかみにし、そのまま思いのたけを壁に叩き付ける。ドンという重い音がし部屋が微妙に揺れたかと思うと、ズルズルと壁に張り付くようにして床に落ちた。

もういい、と一人弱気なことをいいながら、パタリと横になる。

ここで、「大丈夫？ 疲れているんじゃない？」と、優しく声をかけてくれ、ついでにキリツと冷たいコーラでも持ってきてくれるような人がいれば少しはやる気が出るといふものを、あいにくこの部屋で語りかけてくれる物といえは少し間の抜けた音で時を知らせる時計だけである。

七つの音の余韻の後に出たものは、ハアというため息が一つ。

一人で何もしないでいると、どうも考えが暗くなる。テレビでも見て、気を紛らわそう。そう思い、リモコンを探す。

部屋はだいたい散らかしっ放しにしてあるせいで、日々ウオーリを探すハメになる。今日も同じく。それほど広い部屋でもないのに、物を探すのにはいつも時間がかかる。場合によっては買いに出かけた方が断然早い。声をかければ一人で出てきてはくれないものだろうか、などと考えながら部屋中を見渡す。

——あつた。

案外簡単に見つかった。不思議な物足りなさを感じつつ、床の上、ティッシュケースの陰になっているリモコンと自分との距離を測る。ベッドの上からでも手をのばせば届かない距離でもない。

起き上がるのも面倒で、そろりそろりと手をのばす。精一杯のばした指先にリモコンの角が当たる。もう少しだなとベッドから乗り

出したのが悪かった。被っていた布団を巻き込んで、そのままずり落ちたのだ。運悪く顔から落ちた。

赤くなった鼻を押さえながら、忌々しそくにリモコンを睨みつけた。

その時だった。

ジリリリリと電話の音が鳴り響く。初めは無視を決め込んでいたが、いつまでたっても鳴り止む気配を見せない呼び出し音に、しぶしぶとだが重い腰を上げる。

「ヘイヘイ、今行きますよ〜っと」

と、気の無い返事をし、ボリボリと頭をかきながらリビングへと向かった。

風が少し冷たいものの、心地よい日の光が大地を照らす。

さすがに朝はちよつと冷えてきたのお、と体を振るわせているのは、通称・案内じいさん。読んで字のごとく、旅人の案内を勝手に引き受けている老人だ。誰が頼んだでもなく旅人の世話を焼いている。一度捕まると長話につき合わされたりもするが、優しくなかなか憎めないキャラクターで、みんなのおじいちゃん、という感じの人だ。

毎朝広場まで来て、行き交う人々に声をかけるのが案内じいさんの日課だ。今朝も早くから家を出て、広場を通る人を、今か今かと待ち構えているのである。

通りの向こうからやってくる人影が二つ。案内じいさんが手を振ると、影の一つが手を振り、かけて来た。

「おお、やはりお主らか。あいかわらず早いのお」

「おはようございます。やっぱり、おじいさんの方が早いですね」
少し息を切らせて、丁寧に挨拶するのはバース。

「なんだ。まあだ生きてたのね〜」

遅れてやってきたのはフローネ。小憎らしい笑みを浮かべている。
「何を言うか、まだまだ若いものには負けんわい」

案内じいさんがお決まりのセリフを言うと、三人して笑いあつた。毎朝同じことの繰り返し。平和な証拠である。

「お主らも頑張っておるようじゃの。どうじゃ、仕事の方は。大変じゃろ」

「ええ。大変ですけど、なかなかやりがいがありますよ」

「ま、他に適任者はいないし？ 私たちとしても、能力を活かせるからね。エルフとはいえ、ドラゴンに勝る魔力の持ち主はそうそういないのよ。私たちだからこそできる仕事よね」

フロ・ネは誇らしげに、淡い緑色の髪を、ふわっとかきあげた。手を戻した時、腕時計が視界に入る。

「あ、もう行かなきゃ。ドラゴンたち、もう起きちゃう。じゃあね。今日一日頑張って生きなさいよ」

「そう簡単に死んでたまるかい！」

あいかわらずの挨拶で別れる。フロ・ネが走り出すと、バースも慌ててその後を追いかける。じゃあ、また。と手を振りながら駆けていくバース。フロ・ネに追いついたくらいで、フロ・ネが手を振り回しているのが見えた。声こそ聞こえないが、遅い！ とでも言われているのだろう。だいたい想像がつく。フォッフォッフォと一人笑った。

双子の後姿を見送ると、どっこいせと言いながら、噴水のふちに腰をかける。杖に手をかけ、あごについて待っているのだ。双子の次に来るのは誰かな、と。

しばらくすると、次々に人がやってくる。動き出す時間はだいたい同じなのか、いつもこの時間帯は人が多い。

自分に話しかけてくる人の割合は低くなるものの、見ているだけで心が満たされる。仕事、勉強、息抜き……それぞれの目的のために動く朝。おはようと交わされる笑顔。そんな日々の変わらない光景が毎日楽しみで、これがある限り、名残惜しくて死んでも死にきれない、とよく言うのだ。

行き交う人の中でも、ルーディを心待ちにしている。あの元気な

見習いの姿が見れるならそれでいいのだ。

ところが、いつもならパタパタと走り抜けていく時間をとくに過ぎているのに、今日はまだ来ない。あの元氣娘が風邪を引くとも思えない。こりゃ寢坊でもしたかなと人知れずほくそえむ。そろそろ泣きそうな顔をしながら走ってくるだろう。その姿を想像して、また笑った。

そうは思うもののやはり少し心配で、立ち上がり、通りの向こうを目を細くして見る。

「おじいちゃん！」

背後から聞こえてきたタタタタという軽い足音がドンという衝撃に変わった。

とんだ不意打ちに、そのまま倒れてしまった。

握り締めていた杖をふりあげて、どなる。

「コラコラ、年よりはもつと丁寧に扱え！」

「あ、ごめんね、おじいちゃん……。ちよつとビックリさせたかったんだけど……」

ルーディがしよげると、案内じいさんは慌てて、わしは怪我なぞしておらん。ピンピンしとるわい、とガッツポーズをしてみせる。するとルーディの不安そうな顔が、パツと明るくなる。

「そ、そうじゃ、遅刻するぞ。ホレ、急がんと」

「えゝ？ 今日の授業は午後からだもん。開通式のお手伝いをするんだよ？」

両手をあわただしく動かしながら、自分たちがどうするのかを事細かに伝える。

「おお、おお。楽しみにしとるぞ。じゃが、昼からなら何をしに行こうとしていたんじゃ？」

「あのねえ。調教師さんにも伝えに行くの。あの人たちつてえ、いっつも行事に参加してないでしょ？ だから、今度も知らないままであんなに可愛いわいそうだなあ、と思ってえ」

ドラゴンは、ちよつと怖いけど……と消え入りそうな声で付け足

す。

実を言うと、行事の度に声をかけているのだが、バースは仕事理由に、フローネは面倒くさいと言っていつも参加しないのだ。知らないわけではない。

だが、ルーディが誘いに行つて、そう簡単に断れる人もいないだろう。なかなか立ち去ろうとしない魔法使いに、困惑するエルフの姿が目につく。また、怖いながらもドラゴン飼育所に立ち向かうルーディの姿もまた見ものだとはくそえむ。

「おじいちゃん？」

「ああ、わしも行こうとするかのう。あの二人も……」

ふいに黒い大きな影が辺りを包みこむ。雲かな、と空を見上げると、竜の姿が見えた。

「あ、グローライドだ」

「何じゃ、それは」

「ドラゴンの種類だよ。翼の先つちにトゲがあるし、ノーツアイ種と違って、角が一本だもん。グローライド種はね、とっても大人しい地属性のドラゴンなんだよ。ドラゴン飼育所から出てるって事わあ、あの二人が乗ってるのかなあ」

「はて、ルーディや。ドラゴンはニガテでなかったか？ やけに詳しいようじゃが……」

「近くにいと、グオーっていうから怖いけど、写真や遠くから見るとくらいなら平気。それにねえ、この前、ドラゴンの事、勉強したばっかだもん。」

多分、調教師さんたちが乗ってたから追いかけるね。じゃあ！」
パタパタと走り去っていった。

「なんじゃ、わしはおいてけぼりかいの」

背に哀愁を漂わせつつ、魔法使いを見送り、とぼとぼと家へと帰る老人であつた。

「調教師さあん……」

「ん、何？ あのちびっこ」

先に気づいたのはフローネだった。下の方で、大声で叫びながら、パタパタと追いかけてくるものがある。普段から人付き合いもろくにしていないことも重なり、誰が誰だか判別がつかない。

「グリーン・フェロウさんのところの教え子さんじゃない？ ロープ着てるし、杖持ってるし」

「バース！ 前見る！ この子、かなりの方向オンチなんだから、どこ行か分からないでしょ！」

ピシヤリと叱りのお言葉を受け、手綱を握りなおし、前を向く。

「だったら、フローネがやればいいじゃん……」

「なんか言った？」

口について出た言葉は戻すことはできない。歯切れ悪く、ゴニョゴニョと言いながら、適当な言い訳を探す。

「いや、あの子どうするのかなあって。何だか、僕らのことを呼んでるみたいだし？」

「フン。ほっとけばいいでしょ」

ホラホラ早くする！ と後ろから手綱を取られる。ピシヤンとドラゴンを叩くと、ドラゴンは急に速度をあげた。

フローネの手にかかるのと、どんな大人しいドラゴンでも暴れ馬、もとい暴れドラゴンと化す。それだけ荒い運転をするのだ。今でこそ慣れたが、他の人はとても乗せられないな、と心の中でつぶやいた。

次第に小さくなっていくドラゴンを必死でおいかけていたルーデイだが、ついに諦めた。一度立ち止まり、ふう、と深呼吸をするとトボトボと歩きはじめた。走ってだめなら、歩いてみるのだ。会う人会う人に、手当たり次第に聞いていけば、そのうち追いつくだろう。

誰に頼まれたわけでもないが、最後までやり通すのがルーデイだった。

しばらく歩くと、ドラゴンの姿が目に入った。赤い皮膚が遠くからでも見える。

「ノーツアイ種？ ……ん、調教師さんたちのグロライド種だもんねえ……」

首をかしげながらも、人垣を分けながらのぞいてみると、ドラゴンが寝そべっていた。今日開通するハズの、線路の上に、快適そうに眠っていたのである。

誰に押されたのか、転がるようにして前に出ると、お目当ての人とめぐり合えた。

「調教師さん！」

「な、何よあんだ！ コラ、ひつつくな！」

「フローネ、あの子だよ。さっき追いかけてきた子」

「知らないわよ、そんなこと！」

フローネは腕を大きく動かし、ルーディを振り払う。

「まったく、馴れ馴れしい！」

ぶつくさ言いながら、ドラゴンを睨みつける。相手はあのノーツアイだ。主人以外の者の言う事は決してきかない種類のドラゴンだ。「ファンタム！ 起きなさい！」

ファンタムと呼ばれた赤いドラゴンは大きなまぶたをゆっくりと押し上げると、すぐ閉じてしまった。それを見ると、チツと舌打ちをする。やはり、言う事をききそうにもない

「エルフさん、大丈夫ですかい？」

そう横から声をかけたのは駅長だった。巨人族の血が流れているとかいないとか、とにかく体が大きいのだ。彼の横に並べば、誰でも子供のように見えてしまう。

さすがのフローネも、思わずたじろいだ。

「分かったわよ。こうなりや実力行使ってね」

きびすを返すと、バースに合図を送る。バースといえば、乗り気ではないようだが、フローネの無言の圧力の前に、素直に従うのだった。

前もって計画されていたかのように、迷うことなくグロライドに近寄り、何かを伝えて、飛び立たせる。さほどドラゴンではないのだが、それでも人間と比べればかなりの大きさがある。地をたつ時に巻き起こる風は、辺りの樹木を草のように揺らした。

「さてと、やりますか」

フローネはドラゴンを見送ると、肩をぐるぐると回す。準備運動もそこそこに、手ごろな枝を拾い、魔方陣を描き始めた。

それを確認すると、バースは観客を安全なところまで下がらせる。交通整理でもするかのように腕を振っていると、横から覗く顔がある。

「……。ホラ、危ないから下がっててね」

「調教師さん……。ノーツアイ種には魔法、利かないよぉ？」

「やっぱり魔法使いだね。確かに、ファンタムには魔法は利かない。ドラゴン自体には……ね」

まあ見ててよ、と微笑んでみせる。

そうこうしているうちに、魔法陣が完成する。円に大小八つのトゲがついたような形だ。

「バース！ あと、そのちびっこ！ 手伝って」

フローネの怒鳴り声が完成の合図だ。バースは適当に返事をする。と、ルーディに向かって言った。

「というわけで、頼めるかな？ えっと……」

「ルーディだよ。魔法は……あの、あんまし……得意じゃない……けど」

恥かしそうに言葉尻を濁し、少し上目遣いになるルーディ。おいで、とのばされた手をつかむ。

「フローネ。風の魔法でいいよね」

「風？ 何でえ？」

「風をおこして、アイツの目を覚まさせるの。ダメなら少し浮かして、あつちに吹き飛ばしてやるのよ。少しは目も覚めるでしょ」

「ふえええ！？ 吹き飛ばしちゃうのぉ！？」

ルーディは想像したのか、痛そうな顔をし、今にも泣き出しそうになった。

「そのために魔力増幅の魔法陣を描いたのよ？ 嫌なら帰って。邪魔だから」

勝手に呼びつけておきながら、今度は帰れと言い放つ。それどころか、ルーディの肩をドンと強く押した。

かろうじて踏みとどまったルーディは不満そうな顔をし、何も言わずに杖を振り上げ、呪文を唱え始めた。

「な、ちよつと……」

「ルーディちゃん！？ 呪文間違つて……」

バースの静止もむなしく、次の瞬間、魔法陣の三人をまばゆい光が包んだ。

それまで寝ていたドラゴンも異変に気づき、片目を開ける。だが、興味なさそうに再びねむりについた。

パシユンという音がしたかと思うと、呆然とする観客を残し、三人は消え去っていた。

赤き竜は地を揺るがすようないびきをかいだ。

「あんた莫迦でしょう！ 中途半端に転移魔法使うなんて、下手したらバラバラ死体じゃない！ しかも、どうやったら転移魔法と風魔法を間違えるのよ！」

どことも知れぬ所でルーディを罵倒する。ルーディが泣こうがわめこうが関係なしに、むしろ、やかましくなるフローネ。

「あ、もしかして、ルーディ？」

「ふえ……誰？」

不意に背後から声をかけられ、ゆっくりと振り向いた。

「……！ しげおさん！」

「あ、まだ言ってなかったっけ？ 改名したんだ。今度から」UNって呼んでよ」

ハハハと笑う。で、と仕切りのおすように強調して言うと、静か

に続けた。

「何でここにいるの？」

ルーデイが答えようとするより先に、フローネが口を開く。

「このバカが、失敗してこんな所に飛ばされちゃったのよ！ それより、何であんたがここににいるわけ？」

このバカ、という部分をこれみよがしに力を込めて言った。

すると、JUNは面食らったような顔をし、つぶやくようにして答えた。

「なんでって、ここ、FFM・PULSなんだけど……」

「……ということは、JUNさんのところなんですか」

「って事は！ グローライド来ているでしょ！？ あの町長も！！」
フローネの剣幕に気おされ、どもるJUN。その時、なんとも
んびりした声が聞こえてきた。

「JUN？ どうしたんだよ」

バースが声の主を確認するが早いか、フローネは声の主に掴みかかっていた。

「町長さん！」

ルーデイが喜びの声をあげる。

フローネに胸ぐらをつかまれ、前後に揺らされていた町長は、薄れ行く意識の中でルーデイの姿を見た。

気のせいか次第に青ざめていく町長の体から、力が抜けていくのを見たバースは、もうやめたら？ と優しく諭し、フローネの腕から町長を奪い返す。

やっと開放された町長は、その場にへたり込み、ゲホゲホと咳き込んだ。JUNは咳き込む友人のもとに駆け寄り、冗談まじりで慰める。

「グローライドはどこ？」

呆れというか、ため息交じりに聞いたです。

「ああ、あのドラゴン？ あっちだよ」

「ふうん。じゃあ、バース。そっちのちびつこと、グローライド頼

んだわよ。私は町長引つ張っていくから」

指示を下すと、バースの意向も確かめず、町長の腕を強く握り締めた。ポケットから鳥の羽のようなものを出すと、大空へ放り投げる。すると、風が巻き起こり、次の瞬間、二人はどこかへと消え去っていた。

さようならと言う暇もなかった友人を見送ると、JUNは言った。
「何があつたかは知らないけど、また来いよって伝えておいてもらえる？ コーラまた飲もうぜ、ってさ」

「うん、まかせて」

「ちゃんと、伝えておきますよ。では」

バースがグローライドの手綱を握り、引き出してくると、ルーデイは思い出したように顔を引きつらせた。

「ドラ……ゴ……。いやあああ……！」

一目散に逃げ出そうとするルーデイの服を掴むと、じたばたと暴れまわる手足を押さえ込んだ。ため息をつくとき、呆れ半分に言った。
「グローライド、先に行ってくれ」

そう言われたドラゴンは、素直に従い、飛び立っていった。

バースは未だ混乱の中にあるルーデイを羽交い絞めにし、フロ―ネと同じ道具を使い、消え去った。

「さらば、我が友よ」

JUNは両手をズボンのポケットに突っ込み、空を見上げて、そうつぶやいてみた。

風が冷たかった。

「フアンタム、ここにいたら、みんなに迷惑かけるだろ？ 早く戻るんだ」

線路の上で寝そべっていたドラゴンは、面倒くさそうに目をあけ、声の主を確認すると、少し慌てた様子で大空へと飛び立っていった。

そうして無事、開通式は執り行われた。

開通式の後に、町長の一大発表、改名についての反応は薄かったとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1709a/>

ドラゴン注意報

2010年10月8日15時22分発行